

「離れられない」という人間関係の病理についての考察 —小川洋子の小説『薬指の標本⁽¹⁾』を通して—

清源 友香奈

— 目 次 —

1. 本稿の目的
 2. 方法
 3. 物語の検討
 4. 総合考察
- おわりに

1. 本稿の目的

「わたし、今まで一度も恋人なんて呼べる人と付き合ったことがないから、よく分からないんです。ただ彼とは、どうしても離れられない、そういう気持ちと状況だけは確かにあるんです。そばにいたいなんて、なまやさしいことじゃなく、もっと根本的で、徹底的な意味において、彼に絡め取られているんです」(85頁、86頁)。

これは、小川洋子の小説『薬指の標本』に出てくる主人公「わたし」の台詞である。この台詞からは、「わたし」が「彼」に対して抱いている感情が、「そばにいたい」というような、自身の内側から自然に生じる感情ではなく、そのような感情を「なまやさしい」と感じるほどの切実さを孕んだ感情であることが分かる。このような、切実さを伴って他者から「離れられない」という状況からは、嗜癖

が想起される。嗜癖とは「ある習慣への病的な執着」のことであり、大きく三つのパターンがあるとされる。⁽²⁾一つ目は、アルコールやニコチン等の「物質を体内に入れることで起こる」「物質嗜癖」であり、二つ目は、ショッピングやギャンブル等の「何かの行為や過程に執着し、それが自分にとって悪い影響があってもやめられない」「プロセス嗜癖」、そして三つ目が、「困った関係なのにやめられない」という「人間関係嗜癖」である。人間関係嗜癖にはさらに、必ずしも性関係とは関連しない「共依存」と、セックスを介することで相手を繋ぎとめようとする「恋愛嗜癖」が存在し、後者は「愛しすぎ現象」とも呼ばれている。⁽³⁾このような「共依存」「恋愛嗜癖」（「愛しすぎ現象」）に代表される人間関係嗜癖は、いずれも尽くすことで「必要とされる快感」を得ようとするものであるが、他者への奉仕は奨励されるものでもあるため、どの段階から「病的」となるのかは判断が難しく、そのため嗜癖者が治療機関を訪れるのは症状が相当に深刻化してからとなる（註3参照）。

このような症状深刻化のプロセスにおいて、どのような体験が為されているのかについて深く検討されることは、病理的な人間関係を継続せざるを得ない人々の理解と支援において役立つと考えられる。本稿では、「離れられない」という人間関係の病理の深刻化において為されている心的体験について、心理学の視点から考察することを目的とする。

2. 方法

小川洋子の小説『葉指の標本』には、「わたし」が「どうしても離れられない」と言うような「気持ちと情況」に至るまでの心的体験が、「わたし」の視点から詳細に描かれており、本作品を検討することで、症状が深刻化してしまった人からは明らかにされ難い深刻化のプロセスにおける心的体験が汲み取れることが期待される。従って、本稿では『葉指の標本』を心理臨床学的視点から象徴や意味を汲み取りつつ考察することを通して、「離れられない」という人間関係の病理の深刻化において体験されている「気持ち」や「情況」に迫る。

小川（2011）は、小説を書くことについて「思い切り想像の翼を飛翔させ、どんなに遠く現実から離陸したつもりでも、物語は宙にふわふわと漂う単なる妄想

ではなく、根は必ず、現実を生きる人間の内面と結びついている」と記している⁽⁴⁾。また山（2001）は、芸術作品に触れた時に、人が心の深いところから揺り動かされるということが起きるのは、その作品の根底に「根源的、普遍的な何か」があり、それが芸術家という個人を通して各々の手法で表現されており、その作品の根底にある「何か」と符合するものが鑑賞者の側にも付置されているからであると説明している⁽⁵⁾。つまり、個人の内面のさらに深くの、多くの人と共通する「根源的」で「普遍的な何か」を掘んで、各芸術家の手法によって形が与えられたときに、その作品は多くの人に受け入れられるものとなると言える。逆に言えば、多くの人に受け入れられる作品とは、多くの人に共通する「根源的」で「普遍的な何か」をその作品の中に包含しており、たとえその作品自体は個人の表現であっても、包含されている「何か」はフィクションではなく、「現実を生きる人間の内面」が表象されたものであると言えるのではないだろうか。

『葉指の標本』は、2005年にフランスで映画化されており⁽⁶⁾、これは本作品が、国を越えて多くの人に受け入れられる「何か」をテーマとして包含していることを意味していると考えられる。「離れられない」という人間関係の病理が描かれているこの作品が、国を越えて受け入れられていることは興味深い。それは、本作品が意識レベルでは理解出来ない「根源的」で「普遍的」な「気持ち」や「情況」を表象し得ているからこそ起こることであろう。そして、本作品の作者である小川自身が、物語の根が「現実を生きる人間の内面」に結びついているという実感を持っていることから、本作品を考察することを通して、この物語が包含する「人間の内面」に結びついた根源的で普遍的な「何か」が見えてくることが期待される。

ちなみに、本稿では人間関係における「根源的」で「普遍的」な「気持ちや情況」を表象し得た作品という位置付けで『葉指の標本』を検討対象とするのであり、『葉指の標本』の作者個人を分析することを目的とはしていない。

ところで、『葉指の標本』には物に対する「誠意」というものが描かれている。物に対する「誠意」は、『葉指の標本』の登場人物の一人、標本技術士である弟子丸氏が、依頼人の持ってきたキノコを見た時に感じた「標本にするのなら急がなければ、と思いました。既に乾燥と腐食が始まっていたからです」（22頁）という台詞が明確に示している。つまり、物に対する「誠意」とは、その物がその

物として在ることを優先することであり、その物に対する個人的な感情は挟まず、二元論的に、自然科学的に対することである（"対物的次元"）。従って、物に対する「誠意」が重んじられるその場は、その物を持ってきた人の気持ちといった目に見えないものは一切排除される場なのである。物に対する「誠意」は、物語に登場する「標本室」が"対物的次元"のシンボルとして機能する上で欠かせない重要なものであると考えられる。本稿では、物に対する「誠意」が最も大切にされ、人の気持ちのような目に見えないものが排除された世界を"対物的次元"、そして、人の気持ちのような目に見えないものが大切にされている世界を"対人的次元"と呼ぶこととし、この二つの概念を用いて物語を読み取っていく。

3. 物語の検討

物語は、事故によって「わたし」の薬指の先が欠けたことから展開する。薬指の先が欠けたことをきっかけに、「わたし」は標本室という場所に出会い、「離れられない」症状が深刻化していく。以下、症状深刻化のプロセスで「わたし」が体験していたものについて、物語に描かれている意味を汲み取りつつ考察する。

(1) 薬指の先が欠けたことの意味

物語は、清涼飲料水を作る工場に勤めていた「わたし」が、機械に指を挟まれる「事故」で、「左手の薬指」の先を失うことから始まる。ここで押さえておきたいのは、「わたし」が損なったのが「左手の薬指」であったことと、それが「事故」によるものであったということである。

「左手の薬指」は、「結婚指輪をはめ」るところであり、「長続きする愛が宿る場所である心臓を、支配する」ことから「婚約」の象徴とされている。⁽⁸⁾結婚とは、人間関係に焦点を当てて捉えると、男女が共に生きていくということを対等な関係のもとに契約することであろう。それは、依存や束縛といった病理的な関係とは異なり、お互いがお互いの気持ちを大切に、必要であれば伝え合い話し合うことで維持される親密な関係である。他者と対等で親密な関係を結ぶことを契約する際に、誓いの輪を互いにはめるのが左手の薬指であることを考えると、「わたし」が事故で損なったのは、他者と対等な関係を結ぶところ、つまりは他者と

"対人的次元"において繋がる場所であったと言えるだろう。左手の薬指を損なうことが事故によるもので、事故が予期せず偶発的に生じる出来事であることを考えると、「わたし」が薬指を損なったのは偶然の出来事であったと言える。つまり、他者と繋がる場所が損なわれるということ自体は、誰にでも起こり得るということであろう。

(2) 「わたし」の感じ方の変化

他者と繋がる場所が損なわれること自体は誰にでも起こり得ることであるとしても、そのことがその人にどのように影響するかは人それぞれである。「わたし」の欠けた薬指は、その後「わたし」を「標本室」へと導き、「標本室」での体験を通して「わたし」の症状は深刻化していく。症状深刻化のプロセスにおける「わたし」の感じ方の変化を以下に示す。

事故以前の職場での「わたし」は、「楽しかった」「平和な気持ち」「甘い香りに包まれていた」と、感情や感覚を機能させることが出来ており、無難な人間関係を築くことも含めて、"対人的次元"を生きていたと言える（11頁、12頁）。しかし、事故以降「わたし」は仕事を辞め、"対物的次元"の典型である「標本室」に行き着く。この「標本室」で、「わたし」が深く関わることになる人物が弟子丸氏である。弟子丸氏はこの「標本室」の「経営者」であり「標本技術士」である。「標本室」は物に対して誠実であることが最も大切とされる世界であるが、その経営者である弟子丸氏も、物に対して誠実な人物である。また「自分にまつわるあらゆるものを、見事なまでに排除し」（19頁）ている弟子丸氏自身も"対物的次元"を生きている人であると言えよう。

事故以前、"対人的次元"を生きていた「わたし」は、「標本室」での"対物的"な仕事をするうちに、徐々に"対物的"な関わり方を身につけていく。"対物的"な関わり方とは、自身が納得していないのに、「標本室の理念から外れ」ないために「教えられた通りの言葉を繰り返す」ような機械的な関わり方である（27頁）。この対応の仕方は、関わる相手が人であっても非常に"対物的"であると言える。また「わたし」は「相手を安らかにする耳の傾け方や、微笑み方や、相槌の打ち方」を上達させるが、これらは、技術のみが上手くなると"対人的"な次元における本質を損なう類のものであると考えられる。「標本室」での仕事を通して「わたし」

は、本来気持ちが汲み取れてはじめて成立するであろうそれらの行為を、技術的にのみ上手くなっているのである。

"対物的"に仕事をする「わたし」に、弟子丸氏は靴をプレゼントする。靴のプレゼントの意味は後で改めて考察するが、靴をプレゼントされて以降、「わたし」には、物に対する感じ方において印象的なものが二つ生じる。

"対物的次元"において"対人的"感覚を見出すようになる

一つ目は、靴に対する「わたし」の感じ方である。「わたし」は、弟子丸氏から靴をプレゼントされた時、靴が「驚くほどぴったり足になじ」むとを感じる。靴は物であり、"対物的次元"で存在するものである。しかし、「わたし」の靴に対して感じている感覚は、サイズが調度良いという"対物的"な感覚を越えて、相性の良さのような"対人的"感覚を含んだ感覚のようなのである。野口（2010）は、グリム童話の「シンデレラ」に描かれている「靴が足にぴったり合う」シーンについて「まるで足と靴はペニスとヴァギナを象徴しているかのようだ」と考察しており、それは⁽¹⁰⁾"対人的"繋がりにおける身体感覚と重なるものと言える。「わたし」は「足全体が（靴に）優しく包み込まれている」（34頁）とも感じている。優しく包まれるという感覚は"対人的次元"における感覚であると考えられ、「わたし」は、物に対して、そこに存在するはずのない"対人的"感覚を見出すようになっていけると言える。

"対人的次元"における"対人的"感覚を喪失していく

二つ目は、ピアノの曲に対する「わたし」の感じ方である。「わたし」は、ある依頼人が「ビロードで身体を包むような優しい曲」と形容した曲を聞き「複雑で乾いた感じ」と感じる（39頁）。ここで重要なのは、ある人にとっては「身体を包むような優しい曲」と感じられる曲が、「わたし」にとっては「複雑で乾いた感じ」に感じられているということである。「身体を包むような優しい」感じとは、"対人的次元"における大切な要素であると思われるが、「わたし」にはそれが感じ取れなくなっているのである。「わたし」は、"対人的次元"における大切な要素を感じ取れないだけでなく、その曲に対して「ほんの少しどこかが狂うと、全部ばらばらになってしまいそう」と非常に心許ない感覚を覚えるので

ある（39頁）。これは、「対物的次元」を生きている人が、「対人的」感覚を喪失していくということではないだろうか。人間関係嗜癖の一つとされる「愛しすぎ現象」に陥っている女性は「優しく安定した信頼できる男性には魅力を感じない」と言われているが、このような、優しさや安定感、信頼感といった、「対人的次元」⁽¹¹⁾における大切な要素は、「対物的次元」に引き込まれた人にとっては、非常に心許ないものとして写るということではないだろうか。

また「わたし」は「この音の危うさが、曲本来の姿なのか、それとも歳老いた指のせいなのか、本当のことは分からなかった」が「標本にとってはどちらでも構わな」と感じる（40頁）。曲の持つイメージがどのようなものであるのかといったものは、「対人的次元」においては非常に大切な要素である。しかし、標本においては、楽譜通りに曲が弾かれていれば良いのであり、それは欠いていても構わない要素になるのである。この「どちらでも構わな」という感じ方からは、「わたし」が「対物的次元」の方に随分と引き込まれていることが分かる。

自身の在り方が「対物的」になっていく一物として慈しまれることを望むー

「対物的次元」で仕事をするを通して、曲の持つイメージといった「対人的次元」における大切な要素に対する感じ方が変化してきた「わたし」はその後、弟子丸氏との「デート」を重ね、その感じ方が更に深刻化していく。それは「火傷」を標本にしてほしいと依頼してきた少女が、「わたし」の入ったことのない標本技術室に弟子丸氏と入って行くときに見て取れる。「わたし」は、依頼者である少女の肩に回した氏の腕を見て「髪や背中や首筋を全部包み込んでいるかのように、大きく見えた」と感じ、自分に靴を履かせてくれた時の彼の手は「あんなに優しくったかしら」と感じるのである（57頁）。職場での役割を「対物的次元」と捉えるなら、氏の依頼者への接し方は「対物的次元」における物への慈しみとなる。特に身体の一部を標本にすることを望む少女は、弟子丸氏にとっては、依頼者以上に誠実に接すべき標本にする対象物であるとも言える。つまり少女への慈しみは、「わたし」が気にする必要のない別次元のものなのである。しかし「わたし」は「あんなに優しくったかしら」と「対人的」感覚で反応している。「わたし」は、「対人的次元」における「対人的」感覚を喪失していく代わりに、「対物的次元」において、そこに実際には存在しない「対人的」感覚を見出すようになっており、それは、

目には見えない人との繋がりを物に求めるということを生じ得る、感覚の狂いと言えるだろう。

「火傷」の標本の在り処について「わたし」が弟子丸氏に訊ねたとき、弟子丸氏は「ここの標本はすべて、僕にゆだねられているんだ。誰も口をはさめない。もちろん君もだ」(73頁)と言い切る。これは、「わたし」が"対人的次元"において弟子丸氏と繋がる余地が無いことを意味しているだろう。また弟子丸氏は「ここでは、標本がすべてに優先される」(74頁)とも言う。つまり、"対物的次元"を生きる弟子丸氏にとって、最も「慈し」むべき対象は「標本」なのであり、事務員である「わたし」は「標本」には勝てないのである。弟子丸氏と繋がるのは"対物的次元"しかなく、しかも"対物的次元"において氏には絶対的な優先順位が存在する。このような前提がある中で、「わたし」が弟子丸氏に「慈し」まれたいと感じるのだとしたら、「わたし」には"対物的次元"において弟子丸氏に最も「慈し」まれる存在になりたいと思うしかないだろう。それは、"対物的次元"に物として引きずり込まれるということであると言える。

(3) 症状深刻化の背景にあるもの

このように「わたし」は、標本室での仕事を通して、また弟子丸氏との関わりを通して、徐々に"対物的次元"に物として引き込まれていく。ここで、「わたし」が"対物的次元"に物として引きずり込まれるに至る、その背景に存在すると考えられる「わたし」自身の内的要因と、弟子丸氏との関わりが「わたし」に与えた影響とについて考察する。

「わたし」の内的要因

症状深刻化の背景にあると考えられる「わたし」の内的要因は三つあると考えられる。

一つ目は、事故当時の「わたし」に、薬指が欠けたことを受け止められるだけの基盤が無かったことである。薬指が欠けたとき、「わたし」には「親類」も「友人」も居なかった。これを親密な他者の不在と捉えると、外的要因とも言えるかもしれないが、ここでは傷を負ったときに拠り所に出来るような関係を他者と結べていないという、「わたし」自身の他者と繋がるどころの力が事故以前も

あまり機能していなかったという意味で注目したい。他者と繋がる場所（薬指）が損なわれたとき、それまでに親密な繋がりを持っていた経験があるか無いかでは、意味が大きく異なるであろう。一度でも、他者と対等で親密な関係を築けたことのある薬指であれば、たとえ薬指の機能を損なっても、再び同じような関係を繋ぐ機能を取り戻せる感覚を持てると考えられる。しかし「わたし」はその薬指で他者と繋がったことは無いようであり、それは事故に遭った時点における「わたし」の、他者と繋がる力の弱さと言えるだろう。また、年齢的にも「わたし」は基盤が弱いことが予想される。事故当時の「わたし」は二十歳であり、思春期・青年期⁽¹²⁾と言える時期である。思春期・青年期は、それまで生きてきた自分を一度崩し、再度形にするという課題に取り組みねばならない時期であり、それは毛虫が蛹の中で蝶に変容するような変容のプロセスに心的に取り組みねばならない時期⁽¹³⁾であると言える。発達課題においても、連続性・一貫性のある自分というものの感覚を持てるようになった上で、他者と親密な関係を築くという課題に臨む⁽¹⁴⁾ことを考えると、「わたし」がこれほどまでに他者との関係において対人性を欠いた関係に呑み込まれることになったのは、自分というものの感覚を持てるようになる以前であるこの時期であったことは大きいだろう。

内的要因の二つ目は「わたし」の傷つきへの鈍感さである。他者と繋がる場所（薬指）の傷つきは、重大である。しかし、事故に対して「わたし」は「周りが心配するほど」傷ついてはおらず、「もしかしたらそのことは、わたしが考える以上に重大なことだったかもしれない」とどこか他人事である（12頁）。事故の時点での「わたし」の傷つきは、先が「ほんのわずか欠けた」程度であり、その後の対処によっては充分修復され得るものであったと考えられるが、その後「わたし」の症状は深刻化していく。自身の傷つきに鈍感であるために、傷の重大さを意識出来ないだけでなく、症状を深刻化させるような他者との関わりも受け入れてしまっていると考え、自身の傷つきへの鈍感さは、症状深刻化の背景にある大きな内的要因の一つと言える。

内的要因の三つ目は、薬指の欠けた「わたし」と"対物的次元"である「標本室」の相性の良さである。「わたし」は「標本室」を気に入っている。他者と"対人的次元"において繋がる場所が損なわれた人にとって、"対人的次元"は、自身の損なわれたところが欠損として意識される場所であるため、居心地は良くないだろう

う。それに対し"対物的次元"では、薬指はその機能を使うことがないため、傷が欠損として意識されない。しかし、傷が欠損として意識されない次元に留まることは、傷の重大さに気が付く機会を得られない上に、症状深刻化の外的要因に晒され続けることになる。実際、「わたし」は「標本室」に留まったことによって、症状を深刻化させ"対物的次元"に引き込まれている。薬指の喪失にシンボル化されているように、他者と繋がるところが損なわれた人にとって"対物的次元"は心地良さのあるところとして感じられるだろうが、そこに長く留まることは症状を深刻化させることが伺える。

「わたし」に対する弟子丸氏の関わり

次に、「わたし」に対する弟子丸氏の関わり方について考察する。「わたし」が"対物的次元"に物として引き込まれる上で考察されるべきと考えられる弟子丸氏の「わたし」に対する関わりは、靴のプレゼントと、浴場でのデートであろう。以下に、弟子丸氏の関わりの意味を汲み取り、それぞれの関わりが「わたし」に与えた影響について考察する。

―靴のプレゼント―

「標本室」での仕事を通して「わたし」の関わり方が徐々に"対物的"になってきた頃、弟子丸氏は「わたし」に黒い革靴をプレゼントする。弟子丸氏は、かつて浴場であった場所に「わたし」を招待し、そこで「わたし」が「標本室」での仕事を誠実にやっていることの「お礼」として「かっちりした作り」の「黒い革靴」をプレゼントするのである。ここでプレゼントされたものが靴であったことの意味を考えておきたい。

足は自身の身体を運ぶ部位であり、自分の意志で主体的に歩む際に用いる部位であると考えられる。その足を支える靴は、主体性を支えるところであると考えられ、自身で選択した生き方とも通ずるものであると思われる。プレゼントされた靴を履くことが現実的に良くないということではないが、心的な意味を考えた場合に、プレゼントされた靴を履くことは、他者から与えられた生き方を生きることを意味として持つのではないだろうか。他者が選び、他者にプレゼントされた靴を履き続けるということは、自身の生き方を主体的に選択して歩んでいくこ

とから身を引くということと考えられる。弟子丸氏は「左手でわたしのふくらはぎをつかみ、右手で古い靴をかかとから抜き取」（34頁）という形で、前の職場から履いていた靴を脱がせ、プレゼントした靴を履かせるのであるが、この時「わたし」は、脱がされた古い靴を見て「羽をむしり取られた二羽の小鳥の死骸のよう」（34頁）と感じる。身動きも出来ずに古い靴を脱がされる行為は、まさに「わたし」にとって「羽をむしり取られ」る行為であったのだろう。しかし、この時も「わたし」は、「あっけないほどに何の感覚も残さず、（靴が）足から滑り落ちていった」（34頁）としか感じておらず、薬指が欠けたと時と同様、自分の身に受けた傷みに対する鈍感さが伺える。その後、古い靴は弟子丸氏につぶれるほど強く握り締められ塊にされてしまうが、「わたし」は「あっというまの出来事で、逆らうことは出来な」いのである（35頁）。そして弟子丸氏は、自分が見ている時も見てない時も、ずっとその靴を履くように「わたし」に言う。この、それまで履いていた靴を脱がせ、プレゼントした靴を履かせる行為は、「わたし」が歩んできたそれまでの生き方を剥ぎ取り、弟子丸氏の望む生き方に沿うよう型にはめる行為であると言えよう。仕事を誠実にこなしていることのお礼として靴が送られたということは、物に対する「誠意」を大切にしている在り方で「わたし」を物として保存しようとしているのかもしれない。プレゼントされた靴を履くことで、「わたし」はこの重大さに無自覚なまま"対物的次元"で"対物的"に在り続けることの枷をはめられたのだと考えられる。

また、それまで履いていた靴を脱がされ、弟子丸氏のプレゼントした靴を履くことは、「わたし」にとって弟子丸氏への所有権の移譲であったと取れる⁽¹⁵⁾。さらに、足は「性器」の象徴であり、靴は「陰門」を意味することを考えると、弟子丸氏がプレゼントした靴をずっと履くようにという約束は、弟子丸氏以外の他者と繋がることを制止するものであったとも言える。弟子丸氏は靴をプレゼントすることで、"対人的次元"において他者と繋がることの欠けた「わたし」に対し、自分以外の他者と繋がる可能性を封じたのだと考えられる。

―浴場でのデート―

靴をプレゼントされて以来、「わたし」と弟子丸氏は「しばしば」「浴場でデート」をするようになるが、このデートはかなり異様であると言える。弟子丸氏は、

かつての浴槽の底で「わたし」を裸にして抱きしめるのであるが、この時、弟子丸氏は革靴だけは「わたし」から脱がさないのである。衣服を脱ぐことは「仮面を脱ぐ」ことを意味するとされ、仮面が「保護」「正体を隠すもの」であること⁽¹⁸⁾を考えると、「わたし」は無防備に素を曝け出させられていると言える。また、仮面をユング心理学におけるペルソナと取るならば、「わたし」は「世界と立ち向かうときにつける仮面」⁽¹⁹⁾を剥ぎ取られた、魂に近い状態にされていると言える。もし、二人のデートが、お互いが全てを脱ぎ、人と人としてお互いに身体の温もりを求め合うような在り方を取っていたならば、それは対等で親密な在り方であり、「わたし」の薬指は先が欠けていても、他者と親密で対等な関係を結ぶという機能を、関わりを通して少しずつ回復させたのではないかと感じる。しかし、弟子丸氏は「わたし」の仮面を剥ぎ取った上で、足にはしっかりと自分を与えた革靴を履かせており、弟子丸氏自身は白衣を着ているのである。これは非常に"対人"性を欠いた行為であろう。白衣を着ているということは、一人の人間としての弟子丸氏としてではなく「標本技術氏」として「わたし」と関わっていることを意味している。つまり弟子丸氏は、「わたし」のみに無防備に魂を曝け出させておきながら、自分は"対人的"ではなく"対物的"な在り方で「わたし」に関わっているのである。弟子丸氏は、「わたし」が弟子丸氏以外の他者と"対人的"に繋がることを靴で制しておきながら、"対人的次元"では「わたし」と決して繋がらない人なのである。弟子丸氏の「わたし」への接し方も「全ての手順があらかじめ決められているかのよう」で、お互いの触れ合いであるべき行為は「何もかも彼が取り仕切」(43頁)するという、「標本室」での対物的な在り方のままである。また弟子丸氏の抱き方は、「身体の感触を味わおうとする柔らかい抱き方ではなく、わたしを自分の内側にすっぽり密着させるような、胸苦しい抱き方」(45頁)である。「彼の中で、標本にされてしまったような気分」(48頁)を「わたし」に感じさせるこのような抱き方は、「わたし」に"対物的"関係を強要するのみでなく、「わたし」自身に物である在り方を強いる行為であろう。このような「標本にされてしまったような気分」を味わうデートを「しばしば」繰り返すことは、お互いがお互いを感じ合い親密性を深めていく行為とはまるで違い、一方的な所有、被所有の関係を強める行為と言え、それは「わたし」を、物として"対物的次元"に引き込んでいくものであると考えられる。

場所が浴場であったことの意味

もう一つ、デートの場所が浴場であったことの意味に触れておきたい。「わたし」がプレゼントされた靴を履かされた場所でもあるが、デートの舞台はかつて使われていた浴場である。特に、二人が腰を掛けたり、「わたし」が抱きしめられるのは浴槽である。浴槽とは本来お湯で満たされるところであり、温かい液体で満たされたところに裸で浸かる場と考え、子宮の中が連想される。容器が「子宮」を意味するものであり、沐浴が「生まれかわり、再生すること」であることを考えても、沐浴をする浴槽は子宮的であると言える。しかし、かつて使われていた浴槽は乾いており、浴槽としては機能していない。使われていない乾いた浴槽は、お湯が無いために包む空間が存在せず、それはまるで羊水の無い、包み育む機能を失った子宮のようである。しかもこの浴場には、あちこちに蝶の模様がある。蝶は「魂」の象徴であることを考えると、この浴場は、包み育む機能を失った乾いた子宮から、たくさんの魂が喪失していく場のように感じられる。あるいは、蝶は蛹を経て生まれ変わった姿であることを考えると、浴槽は子宮ではなく蛹とも取ることが出来る。乾いた浴槽が蛹だとすると、それは変容の過程を守る機能を失った開いた蛹であろう。ところで、事故に遭った時の「わたし」の年齢は、心的には、毛虫が蛹の中で蝶に変容するような変容のプロセスに取り組まねばならない時期であったと述べたが、思春期・青年期のこの課題はよほど蛹の守りが感じられないと困難であると言われている。守りを必要とする思春期の子どもは、自身の垢さえ身を守る繭とすることを考えると、この課題に取り組む上で、「人が世界と立ち向かうときに付ける仮面」「社会的役割や家庭での役割によって規定される自己のありよう」である服を全て脱がされることが、どれほど守りの無い行為であるかが感じられる。仮面を取り去って他者と関わることは、真の関係を築く上では本来必要なことであるとしても、その行為が「わたし」にとって「对人的次元」での繋がりに結びつくようになるには、「わたし」の基盤はあまりにも弱く、守りが薄いと言える。機能していない浴槽の底で、服を全て脱がせ「標本」にするように抱きしめる行為は、魂が喪失していくような守りの薄い羊水の枯れた子宮で、「わたし」を守りの無さに晒すような行為であると言える。もしくは、変容の準備も出来ていない「わたし」から、変容する上で拠り所となる、それまで生きてくる中で身に付けた「世界と立ち向かうときにつける

仮面」を剥ぎ取り、守る機能を失った開いた蛹の底に拘束するような行為と言えるだろう。毛虫は、変容の過程において蛹の中で一度原形を失う（註13参照）。「わたし」は、毛虫で言うところの原形を失った状態で、守りとなるべき蛹は開いており、毛虫としての自分に戻るための痕跡も奪われ、蝶としての自分になるために必要な繋がりを得る可能性も封じられているのである。このような情況で、唯一「わたし」に与えられているものが革靴であると考え、「わたし」にとって革靴は、蛹に代わり得る守りとして感じられることだろう。このような革靴をどうして脱ぐことが出来るだろうか。

「わたし」に対する弟子丸氏の関わりは、現実レベルで見れば、男性からの一方的なプレゼントと一方的な行為に過ぎないが、心的レベルで見ると、「わたし」を存在の根本的なところから私物化する行為であることが分かる。

(4) 離れられなさー靴を脱がないことと薬指を標本にすることー

このように見ると、弟子丸氏の「わたし」に対する関わりが、「わたし」の症状深刻化に大きな影響を与えていることが分かる。「わたし」は弟子丸氏の「侵食」から脱するために、靴を脱ぐべきであるが、「わたし」にとって靴は脱げるはずのないものなのである。この「わたし」が抱えている靴を脱げない気持ちだが、「離れられない」気持ちの根幹にあるものと言える。

物語の中では、靴を履き続ける「わたし」に、靴を脱ぐことを勧めてくれる人物が登場する。それは、たまたま標本室に標本の依頼をしに来た靴磨きのおじいさんである。足を自分の道を歩むところ、靴をその歩みを支えるところと考えると、「何人もの靴を磨いてきた」このおじいさんは、何人ものお客のそれまでの生き方を見て、これからまたその人がその足で歩んでいけるように、歩みを支えるところを調整してきた人であり、それは人の生き様に触れる仕事と言えるかもしれない。このような人の生き様に触れる仕事を長くやってきたおじいさんが、「わたし」の靴を見て、靴が足を「侵食」しており、このままでは「わたし」が足を失うことになるかと警告する（60頁）。「靴の侵食と彼氏の侵食は、つながってる」と「わたし」に教えたおじいさんは、靴を標本にすることを提案する（86頁）。靴を標本にすることは、他者に与えられた生き方を客観的に見直すことを意味すると言えるだろう。また、弟子丸氏以外の他者と"対人的次元"で繋がる可能性を

取り戻す意味もある。もし「わたし」がこの靴を脱ぎ、標本にすることが出来ていれば、「わたし」の薬指は実体としては欠けたままであっても、他者と対等な関係を結ぶところとしての機能を取り戻す可能性を失わずに済んだと思われる。しかし「わたし」は「もうこの靴を脱ぐつもりはないんです」、「自由になんてなりたくないんです。この靴をはいたまま、標本室で、彼に封じ込められていたいんです」(87頁)と答え、靴を標本にするどころか靴を脱ぐこともせず、代わりに「薬指」を標本にすることを選択するのである。

たとえ靴を履き続けることが「わたし」を侵食するものであっても、「わたし」にとって靴を脱ぐことは「わたし」が存在すること自体を危うくし得る行為であることから、簡単に脱ぐことは出来ないだろう。しかし、「わたし」は、靴を脱がないだけでなく、今度は「薬指」を標本にすることを選択している。左手の薬指を標本にすることとは、他者と対等で親密な関係を結ぶところを、その機能を欠けたまま固定させることであり、根こそぎ自分から分離させる行為である。それは、他者と対等で親密な関係を結ぶこと自体の放棄とも言える。主体性を奪われ、物として相手に沿うという受動的な生き方が全てとなった「わたし」が、物としての受動的な生き方に徹することを、自らの意思で主体的に選択しているのは着目に値するだろう。「わたし」は、自分が絡め取られていることを自覚し、絡め取られることから脱する方法を理解したした上で、なお絡め取られる在り方を選択しているのである。薬指を標本にするという選択は、それまでの「わたし」が自分の傷つきに無自覚に何となく絡め取られてきた行為とは異なり、「対人的次元」において他者と繋がる可能性を自ら全て放棄してでも選ばねばならない、「わたし」の覚悟に基づいた選択であると言えよう。

薬指を標本にすることの選択—薬指の側からの考察—

では、「侵食」から脱する方法を理解した上で、靴を脱がないだけでなく、自身の薬指を標本にすることを選択するとは、どのような想いからなのであろうか。靴を脱がずに薬指を標本にする行為は、他者と親密な関係を結ぶところを自分から分離させ、「対物的」に固定化し、弟子丸氏から強いられた生き方に徹することの選択である。これを、「必要とされる快感」を得るためと捉えるならば、病理的な人間関係に見られる離れられなさと言うしかないが、本稿の目的はその「離

れられない」気持ちに迫る事である。ここで、その「離れられない」気持ちに迫るために、「わたし」の心的体験をもう一つ別の視点から考察したい。それは「わたし」の薬指の側からの考察である。弟子丸氏に自身の薬指の標本の依頼をしに行く時「わたし」は、

「保存液の中はたぶん、なま温かく、静かなのだろう。サイダーのように冷たくもないし、泡の弾ける音がこもったりすることもない。液は爪の先から指紋の溝まで、すっぽりと包んでくれるし、口のコルク栓は、外の埃や雑音を防いでくれる。そして何より、標本技術室の扉は、分厚くて重い。だから安心して、身をまかせておけばいい」(90頁)

と思いを巡らせる。この「わたし」の想いからは、「わたし」が事故に遭って以降、ずっと冷たいサイダーの中に取り残されていたのではないかと感じさせられる。事故に遭った時「わたし」は、傷つきに対しては無頓着でありながら「左手の薬指の先の肉片はどこへ消えてしまったのだろう」(13頁)という疑問を抱いていた。その疑問から「わたし」は実際に、「ソーダが飲めない」という神経症的症状を呈している。つまり、「わたし」にとっては、本体である自分の薬指が欠けたことよりも、欠けた薬指の先がどこかへいつてしまっていることの方が重大だったのである。恐らく「わたし」は、「薬指の先の肉片」をサイダーの中に取り残してしまった時、自身の魂の一部を、肉片と一緒にそこに取り残してきてしまったのではないだろうか。このような説明は、非現実的なように感じられるかもしれないが、何かしらの傷つき体験に出会った時、その傷つき体験を体験した場所に、自身の魂の一部のようなものを取り残してきてしまうことは誰しも覚えがあるのではないだろうか。嫌な思い出のあるところは避けるものである。それはその場所に捉われている自分が居るからであろう。捉われている自分は、本体の傷を疼かせるのだろう。「わたし」は事故に遭った時、もっと自身の傷つきに敏感にことの重大さに気が付き、そこに取り残された魂を自身に引き戻すことが必要だったのだと思われる⁽²⁸⁾。しかし、自身の傷つきに鈍感な「わたし」は、ことの重大さに気が付かず、自身の傷が疼かない所へと、工場から離れてしまったのだろう。事故以降、「わたし」の魂の一部はずっと冷たいサイダーの中に取り残されているのだから、「わたし」はどれほど孤独で安心感を欠いた世界を生きていたか分からない。工場の機械のサイダーの中は"対物的次元"の中でも、他と

繋がりの無い空間である。しかも、薬指の先は「どこへ消えてしまった」かも知れないのである。弟子丸氏は、"対人的"には繋がってくれない人であるが、物に対する「誠意」は誰よりももっており、「標本室」では「管理・保存」は完璧に行われているのであるから、冷たいサイダーの中に自身の魂の一部を取り残してきてしまった「わたし」からすれば、"対物的次元"である「標本室」も、"対物的次元"を生きる弟子丸氏も、よほど安心の出来る存在として感じられるだろう。このように考えると、「わたし」が"対物的次元"の中に、「対人的」繋がりを見出すのは自然なことでさえ感じられる。

薬指を標本にするという行為は、冷たいサイダーの中に取り残された自分の魂を慰めようとする行為だったのではないだろうか。"対人的次元"に比べると、「対物的次元」は、魂の慰めとなる要素を持たない次元であると考えられるが、「わたし」は、「対人的次元」において"対人的"感覚を喪失しつつあり、代わりに"対物的次元"に"対人的"繋がりを見出すという感覚の狂いを持っているのである。そのような「わたし」が、自身の魂を慰める切実な必要性を抱えているのであれば、「対物的次元」に慰めを求めることは自然なことなのかも知れない。

「わたし」が、「わたし」本体から薬指を分離させ、完璧に「管理・保存」された標本として弟子丸氏に委ねることではしか取り残された魂を慰める術を持てなかったのは残念なことであるが、本体が薬指を代償にすることになっても、また心的には他者と対等な関係を持つ可能性事態を放棄することになっても、「わたし」にとっては、取り残された魂を慰める必要があったと言える。取り残された魂の傷つきは、「対物的次元」で物として私物化されることが、痛みではなく慰みと感じられるほどに、より深い痛みを伴っているということだろう。現実レベルでは一見理解し難く見える行為であっても、魂のレベルではそうせざるを得ない切実な理由や、そうしてでも慰めなければいけないほどの傷つきを、事故以降「わたし」はずっと抱え続けていたのだと考えられる。

4. 総合考察

このような考察を経て、「離れられない」という人間関係の病理に陥っている人は、「対物的次元」に物として引きずり込まれており、そして引きずり込まれた

先の"対物的次元"において、そこに実際には存在していない"対人的"感覚を見出していると考えられる。"対人的"感覚は、"対人的次元"においてしか得られない。従って、"対物的次元"において"対人的"感覚を求めることは、"対人的次元"で他者と繋がることの出来る人から見れば不合理なことである。しかし、「わたし」は"対人的次元"で他者と繋がるどころが欠けてしまっており、その上"対物的次元"に留まるうちに、"対人的"感覚を喪失していき、代わりに"対物的次元"で"対人的"感覚を見出すという感覚の狂いを生じさせているのであるから、自分の身に生じていることが不合理なことであるということに気が付くこと自体が相当に困難であることが予想される。

自分の身に生じていることが不合理なことであるということに気が付いていない人に、「浸食」を受けていることを気付かせるのは大きな意味を持つであろう。「離れられない」人間関係の病理の一つである共依存の治療においても、自身が共依存に陥っていることに気が付くことは最初のステップであると言われている⁽²⁷⁾。しかし物語からは、靴を脱げば「浸食」から脱することを理解しても、「わたし」が靴を脱げる状態にはないことが考察された。人間関係の病理に陥っている人が「離れられない」と言うとき、それは「わたし」が現実レベルで見ればいつでも靴を脱ぐことが出来るにもかかわらず、心的レベルで見ると靴を脱げる状態にならないのと同じように、自分の身に生じていることを理解出来ても現実には「離れられない」状態にあるということではないだろうか。しかも「わたし」は、"対物的次元"における繋がりさえ安心感を見出さざるを得ないほど、冷たく不安な所に魂の一部が囚われているのである。"対物的次元"における繋がりの方がよほど温かく安心であると感じるほど冷たく不安なところに魂を取り残してきてしまっているのであるから、現実レベルで見れば苦痛を伴うような行為や、犠牲とも言えるものを払ってでも、「わたし」には取り残された魂を慰める必要があったのである。「離れられない」人間関係の病理に陥っている人の一見不合理に見える行為の背景に、その行為を不合理だと感じる人からは決して理解され得ない深い傷つき体験があることを、支援する側は見落としてはならないだろう。「離れられない」人に対して、靴磨きのおじいさんが「わたし」にしたような、意識的な働きかけは必要であるだろう。しかし『葉指の標本』は、「離れられない」人が、自分の身に生じていることを理解しても、靴を脱げない切実な状況にあることを

教えてくれている。"対物的次元"において"対人的"感覚を求めることが不合理であっても、そうせざるを得ないほど、安心感を欠いた状態にあることを教えてくれている。

「離れられない」人間関係の病理に陥っている人の支援を考えるのであれば、靴との分離を勧めるのみではなく、靴を脱げるだけの基盤を形成する過程から寄り添っていくことが必要であるだろう。そのためには、「離れられない」人間関係の病理に陥っている人が、"対人的次元"において他者と繋がる可能性を放棄し、物として私物化されることでさえ慰みと感じるほどのより深い傷つきを抱えていることを理解し、"対物的次元"に取り残してきてしまった魂の一部を、どのようにして自身に引き戻していくかというところから一緒に考えていくべきではないだろうか。

おわりに

『薬指の標本』を心理臨床学的視点から象徴や意味を汲み取りつつ見てきた。この物語は、他者との対等で親密な関係性を結ぶところが損なわれた思春期・青年期の女性が、最終的に他者と繋がる可能性を自らの意志で放棄するに至るまでの過程における心的世界が描かれた物語として読むことが出来る。その症状深刻化の背景には、"対人的次元"から"対物的次元"へ引き込まれるプロセスがあることが汲み取れ、「離れられない」人間関係の病理に陥っている人は物として所有されることを望まざるを得ないほどの傷つきを抱えているという視点が得られた。一般に、人間関係嗜癖は「必要とされる快感」を得るものとして理解されている。この理解は、「離れられない」苦しみを抱えている人に、実は、離れないことは、自分自身が望んでいることであるという気付きをもたらす点において非常に意義深い。しかし、その理解は同時に、苦しみの責任の所在を当人に帰しており、「靴」を脱げない気持ちや状況を理解することから遠ざけているように思う。対人性を欠いた人間関係にさえ切実な必要性を求めなければならないほどの傷を抱えているという視点が、「離れられない」人間関係の病理に陥っている人の「気持ち」の理解と支援に繋がっていけばと思う。

参考文献

アト・ド・フリース『イメージシンボル事典』（山下主一郎他：訳）大修館書店、1984。

A.W.シェフ『嗜癖する社会』（斉藤学：監訳）誠信書房、1993。

岩宮恵子『思春期をめぐる冒険』日本評論社、2004。

小川洋子『葉指の標本』新潮社、1994。

小川洋子、河合隼雄『生きるとは、自分の物語をつくること』新潮社、2011。

河合隼雄『臨床教育学入門』岩波書店、1995。

河合隼雄『カウンセリング入門』創元社、1998。

コレット・ダウリング『シンデレラ・コンプレックス』（木村治美：訳）三笠書房、1982。

斉藤学『「自分のために生きていける」ということ』大和書房、1997。

中井久夫・山中康裕編『思春期の精神病理と治療』岩崎学術出版社、1978。

中村雄二郎『哲学の現在』岩波書店、1977。

西平直喜 青年期 『発達心理学辞典』（岡本夏木、清水御代明、村井潤一：監修）ミネルヴァ
書房、1995。

ニューマン,B.M.・ニューマン,P.R.『生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性—』（福富護：訳）川島書店、1988。

野口芳子『「シンデレラ」の固定観念を覆す—ジェンダー学的観点からのグリム童話解釈—』『武
庫川女子大紀要』58、2010、1-11頁。

東山紘久『カウンセラーへの道』創元社、1986。

山愛美『「造形の知」と心理療法 ある造形作家の一連の作品に見るイメージの変容』『心理臨床
学研究』vol.18 No. 6、2001、545-556頁。

山中康裕『知の教科書 ユング』講談社選書メチエ、2001。

ロビン・ノーウッド『愛しすぎる女たち』（落合恵子：訳）読売新聞社、1988。

注

- (1) 小川洋子『葉指の標本』新潮社、1994。1992年に、新潮社発行の月刊文芸雑誌『新潮』7月号に掲載された。本稿においては、本小説における重要な場面における引用箇所についてのみ、頁数のみを記載している。

- (2) 斉藤学『「自分のために生きていける」ということ』大和書房、1997、41頁 - 60頁。
- (3) ロビン・ノーウッド『愛しすぎる女たち』（落合恵子：訳）読売新聞社、1988。
A.W.シェフ『嗜癖する社会』（斉藤学：監訳）誠信書房、1993。
- (4) 小川洋子・河合隼雄『生きるとは、自分の物語をつくること』新潮社、2011、127頁。
- (5) 山愛美『「造形の知」と心理療法 ある造形作家の一連の作品に見るイメージの変容』『心理臨床学研究』Vol.18 No.6、2001、545頁。
- (6) 2005年のフランス映画（『L' Annulaire』）。小川洋子の同名小説をフランスの女性監督ディ
アヌ・ベルトランが映画化した。
- (7) 中村は、近代科学の知の本質について、物事や自然をそれ自体で完結したものとしなすとき、
それらは私たちとの生きた有機的つながりを失うことを述べている（中村雄二郎『哲学の現在』
岩波書店、1977）。
- (8) アト・ド・フリース『イメージシンボル事典』山下主一郎他：訳 大修館書店、1984、240
頁。
- (9) 河合は、カウンセリングにおける聴くことについて、「全体的な人間としての態度」が必要
であり、徹底して技術として見るやり方では駄目であると述べている（河合隼雄『カウンセリ
ング入門』創元社、1998、174頁）。また東山は、『「聞き方」というのは、ある意味でテクニッ
クを越えており、人間関係そのものと言ってもよいかもしれない』と記している（東山紘久
『カウンセラーへの道』創元社、1986、104頁）。
- (10) 野口は、19世紀初頭のヨーロッパの文化の在り方から「ダンスに名を借りて性的相性を試
す行為が行われても不思議ではない」と記し、また、中世の女性は通常長いスカートを履いて
おり、足や靴が外からあまり見えないことから「靴は非常にエロティックな意味を持って」い
たこともふまえて、グリム童話の「シンデレラ」の「靴が足にぴったり合う」シーンについて
考察している（野口芳子『「シンデレラ」の固定観念を覆す—ジェンダー学的観点からのグリ
ム童話解釈—』『武庫川女子大紀要』58、2010、5頁、6頁）。
- (11) ロビン・ノーウッド『愛しすぎる女たち』落合恵子：訳 読売新聞社、1988、42頁。
- (12) 11歳前後～22、3歳、または25、6歳が発達過程における青年期とされる。青年期の前期は
特に思春期と言われる（西平直喜 青年期 『発達心理学辞典』（岡本夏木、清水御代明、村
井潤一：監修）ミネルヴァ書房、1995、397頁、398頁）。二十歳は、年齢的には思春期よりも
青年期寄りであるが、ここでは思春期・青年期両方の心理課題について考察することから、思
春期・青年期とした。

- (13) 河合は、「思春期から青年期にかけて、ほとんどの人に『さなぎの時期』がやってくる」と述べ、『さなぎ』の殻の中では常人の想像を絶した変化が生じて」おり、それは「これまでの生きてきた基盤」を崩すものであり「地殻変動にも比すべき体験」と記している。(河合隼雄『河合隼著作集7 子どもと教育』岩波書店、1995、98頁、127頁、128頁)。
- (14) エリクソンの発達段階では、青年期の課題であるアイデンティティの確立の次に、成人前期の課題である親密性の課題に取り組むとされている(B.M.ニューマン・P.R.ニューマン『生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性—』(福富護：訳)川島書店、1988)。
- (15) 靴は所有を表し、靴を渡すことは所有権の移譲を表すとされている。「わたし」は、それまで履いていた靴を弟子丸氏に無抵抗に脱がされた時点で、自身の所有を許してしまっていたのではないだろうか。また、靴を土地の上に投げるとその土地を所有したいと思っていることを表すとされており、プレゼントした靴を履くことを強いることは、弟子丸氏による「わたし」の所有であると取れる(アト・ド・フリース『イメージシンボル事典』(山下主一郎他：訳)大修館書店、1984、577頁)。
- (16) 同上258頁。足は、生殖器の婉曲的表現とされる。
- (17) 同上577頁。靴は陰門を表す。
- (18) 同上132頁。衣服を脱ぐことは、仮面を脱ぐことを意味する。同上421頁 仮面は、保護や、人の正体を隠すものを意味する。
- (19) 山中康裕『知の教科書 ユング』講談社選書メチエ、2001、56頁。仮面は、ユング心理学ではペルソナを表す。ペルソナとは「人が世界と立ち向かうときにつける仮面を意味し、社会的役割や家庭での役割などによって規定される自己のありようを指す」とされる。
- (20) 容器は、さまざまなもの(諸力)が混合する母胎(子宮)を意味し、また、女性の包容のシンボルとも言われる(アト・ド・フリース『イメージシンボル事典』(山下主一郎他：訳)大修館書店、1984、668頁)。
- (21) 同上47頁。〔第1物質〕である水につかることは、再びもとの、未発達の状態へ回帰し、蘇生し、生まれかわり、再生することを意味する。
- (22) 同上94頁。蝶は魂を表す。
- (23) 山中は思春期を「さなぎ」の時代ととらえ、しっかり殻に守られて過ごすことの意味について述べている(中井久夫・山中康裕編『思春期の精神病理と治療』岩崎学術出版社、1978)。
- (24) 岩宮は、下着を変えることや、シャワーを浴びることを嫌がる思春期の少女が増えていることを挙げ、「自分の垢を菌代わりにまとって自分の内側で起こっている変化から自分を守る

うとしている」と記している（岩宮恵子『思春期をめぐる冒険』日本評論社、2004、88頁）。

- (25)「愛しすぎ現象」に陥っている女性達は、「偉大な恋人役を演じ」る努力をしているとされ、この「努力をしている限り、彼女たちは本当の親密さとは何かを知らなくてすむ、つまり、他の人に自分の奥深くまで知られなくてすむ」ことから、親密になることを恐れる女性は演じ続けるのだが、「対等な愛」で結ばれた親密な関係を築くためには、「自分を素直に表し」「自分の奥深くまで知られることを恐れない」ことが必要とされる（ロビン・ノーウッド『愛しすぎる女たち』（落合恵子：訳）読売新聞社、1988、359-362頁）。

- (26) 実際、沖縄では、魂を落とすことを「マブイを落とす」と言い、落ちた魂を元に戻すことを意味する「マブイグミ（魂込み）」という言葉も存在する。

- (27)「愛しすぎる」ことから回復するためには、いくつかのステップがあり、第一ステップは「自分がしていることに気づき、それをやめたいと思った時にはじまる」とされる（ロビン・ノーウッド『愛しすぎる女たち』（落合恵子：訳）読売新聞社、1988、363頁）。

- (28) 今回は、『薬指の標本』を関係性に焦点を当てて検討したが、作中には浴場をはじめ、子宮を連想させる描写が多々見られた。作者が女性であり、「わたし」が女性であることを考えても、本作品には、女性独自のイメージが表象され得ているように思えてならない。枯れた子宮で抱きしめられることの意味も、自身の身の内に子宮を持つ女性と、子宮を持たない男性とでは、その体験は異なると考えられ、『薬指の標本』を検討することで、さらに女性独自のイメージを汲み取ることが出来るのではないかと感じる。